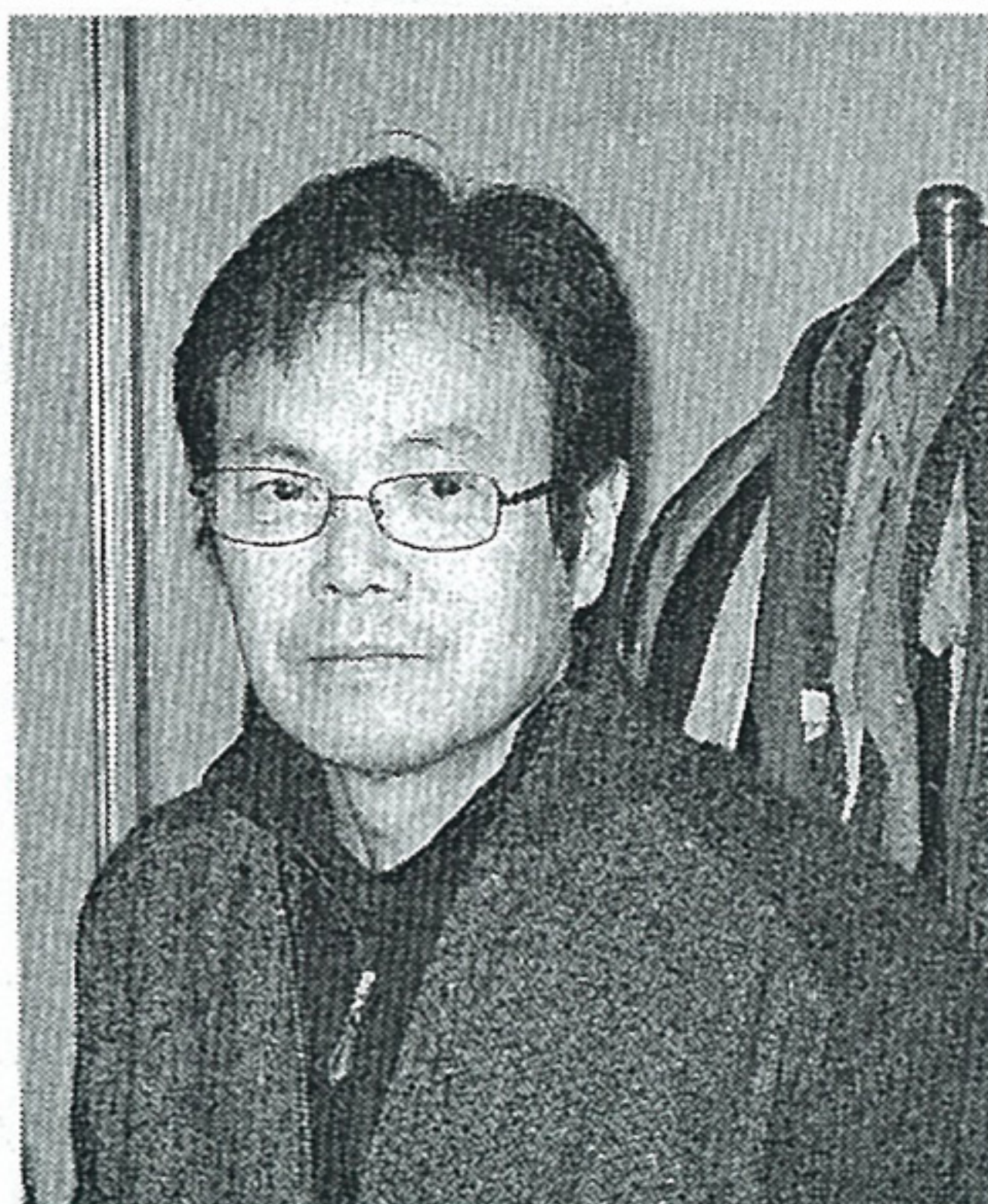


「からむし」
TISM

ニットの名産地として知られる新潟県五泉市。カワノの社長、河野良雄(63)はシルクニットの製造で定評がある。戦国時代の上杉家の経済を支えた要因の一つとされる「からむし」にシルクを混紡した独自製品も考案した。大手業者からの受注生産に頼りがちな五泉のニット業界で、シルクをベースにした独自の商品開発と、販路開拓に取り組んでいる。

シルクニット 独自に開発



カワノ社長
河野 良雄さん

が、加工に手間がかかるため、最近ほとんど使われなくなっていた。からむし製品を企画販売する「ネオ昭和」(十日町市)から河野の元にニットでの製品化が持ちかけられた。だが、「からむしだけで織ると硬くて針が折れてしまった。シルクと融合してなんとか完成した」。試行錯誤

「からむし」と融合し、着心地良く
販路開拓の苦勞、ブランドに生きる

かわの・よしお 1945年村松町(現五泉市)生まれ。日大を卒業後、紺商(十日町市)に入社。77年に独立して起業、83年からシルクニット製品の製造、販売を始める。日本シルクニット協会会長。

の末、二年前にカーディガン、セーターの販売にこぎつけた。着心地の良さから購入者の評判も高い。「天地人の放映でからむしが話題になれば、夏でも涼しい素材として注目されるかもしれない」と期待している。

◇ 大学を卒業して織機の数年、興味を持った

販売、メンテナンスに従事した。その後、独立して五泉で創業。だが、着物離れを背景に、取引相手が次々と廃業し、消えていった。絹糸は余っている。「ならば自分で作ろう」と一九八三年からシルクニットの製造に乗り出した。

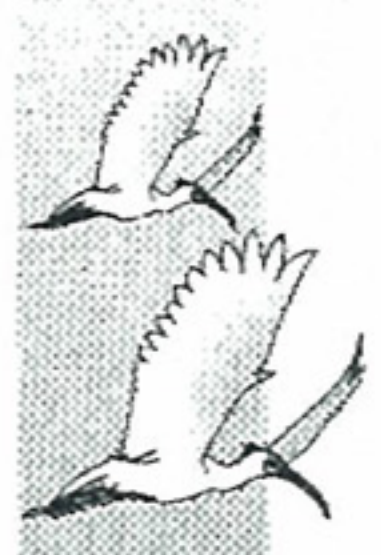
◇ 数年、興味を持った
製品は八割は独自ブランド「シルクニット KA

◇ 五泉はニット製品の特産地として知られるが、ほとんどの業者が大手メーカーや専門店などの下請けで生産している。五泉産ニットは品質には定評があるのだが、店頭で製品を手にとっても、それが五泉産とは分からない。ある業者は「うちは注文を受けて作るだけ。出荷後はどこで、いくらで販売されているかも知らない」と話す。

◇ 敬称略
五泉からシルクニットの発信していきたい

◇ 五泉のニット産業は中国など海外からの安価な輸入品に押され、急激に生産量が減っている。価格競争ではかなわない。だが、自分のブランドがあれば、品質やデザインなど付加価値の高さで対抗できる。「これからはシルクをベースにからむしやウールを組み合わせた特徴ある製品を作り、五泉からシルクニットの発信していきたい」

WANO」として販売されている。シルクニット製品の取扱店がなく、自分で売るしか道がなかった。結果的に製品を自分のブランドで売り、値段も自分で決めることができる立場になった。それが河野の強みでもある。



新潟 新潟

新潟 0255-2222-7547
長岡 0258-371-1000